

青島神社の歴史

青島は古代から神聖な場所と考えられてきました。当時は、島自体が神の住まう場として信仰を集めていたと考えられています。島への橋がかけられる遥か前から、人々は干潮時に歩いて島に渡り、海で身を清めてから儀式を行っていました。この場所に神社が存在したことを示す最古の記録は、平安時代（794-1185）に遡ります。江戸時代（1603-1867）には、飢肥藩（現在の宮崎県南部の海岸沿いの地域）の大名であった伊藤家の庇護を受け、青島神社は勢力を拡大しました。1737年には、それまで神社の神主と高官以外による神社の境内への立ち入りを禁じていた規則が撤廃されました。

青島神社は、8世紀に書かれたと言われている日本最古の歴史書である『古事記』に登場する山佐知毘古と豊玉姫の伝説と密接に結びついています。これは、日本の創世神話を追いながら、天皇家の祖先が神であることを説明する話のうちの1つです。その中では、狩りの達人であった山佐知毘古と海の神の娘の豊玉の恋が語られます。2人は海辺で出会いました。その場所は、青島の民間伝承では「鴨が冬を越すためにやってくる場所」と言われています。そして子供を授かるのですが、2人は最終的には永遠に離れ離れになりました。これは、この伝説の中で死すべき人々の世界と神々の世界の分離を表す重要な契機となっています。山佐知毘古、豊玉、そしてこの伝説の中で2人が出会うきっかけとなった塩椎は、神格化されて青島神社で祀られています。青島神社は以前は鴨就宮（「鴨が休む神社」）と呼ばれていました。山佐知毘古と豊玉の話は、神社の神話館でより詳細に学ぶことができます。